
優しい君と秋の香り

ヒバナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

優しい君と秋の香り

【Nコード】

N36130

【作者名】

ヒバナ

【あらすじ】

僕が中学生だった頃の優しい思い出

自転車を通り抜けた路地裏で鼻についた金木犀の香りに胸がじわりと痛んだ。

甘だるい香りが立ち込めてくると思い出す。遠い昔の淡い気持ちが燻る。

まだあれは僕が今よりずっと若くて、ずっと子供だった頃の話。

中学三年生の秋。打ち込んでいた部活動も引退となり、するべき勉強にも力が入らず

ただぼんやりと日々を過ごしていた頃、珍しい時期に転校生がやってきた。

ほっそりとした女の子。小さな顔に見合わない大きなめがねをして、俯きがちに

とても恥かしそうに教室へ入ってきた彼女への同級生の第一印象はあまりいいものじゃあなかった。骨が浮き出していて、びっくりするほど白いものだからその日についたあだ名が「ガイコツ」。女の子のあだ名にしては酷いものだったけれど、彼女はとくに嫌な顔もせず曖昧に微笑むばかりだった。

いじめられるわけでもなく、ちやほやされることもなく、穏やかに自然に彼女の存在は馴染んでいった。友達も少ないながらできたように、声を出して笑ったところを見たことはなかったけれど、いつも微笑んでいたように思う。落ち着いた雰囲気はどこか大人びていて、なぜか僕は彼女のことをしりたくてしかたがなかった。

僕も目立つほうではなかったから、ことあるごとに彼女に近づこうと躍起になっていた。

荷物を運ぶ彼女を見つけては、無言でそつと横から取り上げて無理やりに手伝った。運ぶ間はお互い黙ったまま、終わると小さな声でお礼を言われるのがたまらなくうれしかった。

でも僕は頷くだけで決して口をきかなかった。格好を付けていたわけではない。恥かしくてとてもじゃないが話しかけることなんてできなかったからだ。

そうこうしているうちにあつという間に冬になってしまった。その頃には僕は既に彼女へ抱く気持ちが恋なのだと気付いていた。

もうすぐ冬の長期休暇に入ってしまう。長い間彼女に会えなくなるに焦った僕は、意を決してこのとき初めて彼女に話しかけた。残念ながら何を話したかは緊張のあまり覚えていないが、長期休暇中に会う約束することに成功したようだった。

受験生だということをすっかり忘れていた僕は、会う口実に勉強をしようということにしていたらしい。待ち合わせのファーストフード店で待つ間、そわそわと落ち着かなかった。

約束の時間ピッタリにやってきた彼女を見て驚きに目をひん剥いた。普段かけているめがねをはずして、見慣れない柔らかな生地のワンピースに身を包んだ彼女はまるで別人だったのだ。道ですれ違ってもきつとわからないと思う。

ますます緊張で俯いてしまった僕に優しく微笑みかけて教科書を開いた彼女を、勉強が終わるまでまともに見ることができなかった。

時々聞こえる咳払いも、紙をめくる音も、シャーペンを走らせる白い手も、頬に影を落とす長いまつげも、全部全部僕の鼓動を高鳴ら

せる。有頂天になっていることに気付かれまいと必死に教科書に齧りついていても、もう勉強どころではなかった。

僕が想いを巡らせている間にいつの間にか日がくれて、彼女が教科書を閉じたので、もう終わりだという無言の合図なのだと気付いた。結局何も話さないままだったと落胆して、最後の最後彼女を家まで送って行ったその家の前で僕はようやく声をひねり出すことができた。

「ごめん、つまらなかったでしょ」

顔なんて見れなかった。申し訳ないのと情けないのでもう恥かしくて今すぐ走り去ってしまいたかった。どう思われても仕方ないと思った。

でも、彼女は罵るでもなく呆れるでもなくいつものように微笑んで首を振った。

「誘ってくれて、すごく嬉しかったよ」

それから鞆の中から包みを取り出すと少し躊躇いながら差し出した。きた。

「いつもありがとう、これ、よかつたら食べて」

泣き出してしまいそうに嬉しかった。お礼を言うのはこっちなのに受け取ってよく見ると綺麗にラッピングされたクッキーだとわかった。それをそつと抱きしめて深くお辞儀をすると僕はそのまま走り出した。人生で一番幸せな一日だった。

長期休暇明けの教室の空気はやけに重苦しく、女子がみんな噤り泣いていた。

何事かと思つて教室を見渡して気付いた。いつも早い彼女が居ない。そして

彼女の机の上には花の生けられた花瓶がおいてあつた。

立ち尽くして動けなくなつた。たちの悪いいたずらなのだと信じたかつた。

しばらくして入ってきた先生はどこか力なく着席を促がして、彼女の死を告げた。

轢かれそうになつた子供を助けたそうだ。

最後の最後まで優しい彼女らしかつた。

体育館で黙祷があつた。校門にはマスコミのカメラが来ていて腹がたつて悲しかつた。

僕はそのあと教室へは戻らなかつた。校舎裏の雪が積もつた金木犀の下で声を上げて泣いた。

僕は彼女に好きだと告げることはできなくなつた。

それから何年もたつて、それなりの大学を出て、それなりの会社に就職して、大切な人ができて、結婚して、今年子供が生まれた。

彼女が居なくなつたあとと変わりなく続く日々の中で僕は生きている。生きているんだ

僕は彼女を思い出にしまった。
きつとこれからも金木犀のにおいとともにやってくる。何年たつて
もがりがりなままの
あの日の彼女が

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3613o/>

優しい君と秋の香り

2010年10月17日14時51分発行